

高崎山
写真
ヒストリー
自然動物園70年

かつて高崎山のふもとでは野生ニホンザルによる農作物被害が相次いだ。1949年にはサル狩りが実施されたが、一頭も捕獲されなかった。当時の大分市長だった上田保氏(故人)は、サルを集めて観光客に見せることができれば「一石二鳥」と考え、音と餌でサルを集めることにした。52年11月26日に餌付けを開始。今の園内の「サル寄せ場」近くに当たる場所(現在は立ち入り禁止)で、自らほら貝を吹き、餌としてリンゴとサツマイモをまいた。だがサルは山から姿を見せない。それでも上田氏はあきらめず

「一石二鳥」作戦で園誕生



サルとの根比べの日々が続き、2カ月余りたった53年2月、サルが姿を見せるようになった。そして高崎山自然動物園が53年3月15日に誕生した。



餌付け1周年記念イベントの様子の写真(上、高崎山管理センター提供)は53年

位置は今と変わらないですね」とも話した。

11月の撮影。イベントは「サル寄せ場」に集まった大勢の来園者が、園側から配られたサツマイモをサルに与える内容だったという。「開園当初は餌付け開始日を重んじて、11月に記念イベントをしました。今は開園日を重視して節目の年の3月に記念イベントを実施しています」とセンター職員の下村忠俊さん(50)。写真を見ながら「柵の

「ほら貝を吹く上田保氏」の写真(下、同)は62年の撮影。上田氏本人が開園当初の様子を再現した場面という。同職員の江川順子さん(48)は「上田氏が立つ大きな岩は、今もサル寄せ場の近くの場所(現在は立ち入り禁止)にあります。それにしてもほら貝という発想がすごい。よくサルが集まったなあとも思います。」(原則、第2、第4日曜日に掲載します)